

東京蜘蛛談話会 2015 年度採集観察会

1. 期 日： 第2回 2015年7月12日(日) 第3回 2015年10月18日(日)
第4回 2016年2月21日(日)
2. 場 所： 神奈川県秦野市渋沢丘陵
午前中は水田、水路周辺 午後は丘陵の林内
3. 集 合： 集合 10:00 小田急線渋沢駅改札口
4. 世話人： 水山栄子
携帯電話：090-6143-6942

東京蜘蛛談話会 2015 年度合宿

2015年度の合宿は、山梨県南巨摩郡早川町南アルプス生態邑にて実施します。詳細および申し込みについては、別紙ご参照ください。

1. 期 日： 2015年7月25日(土) から 27日(月)
2. 担 当： 加藤輝代子

会費値下げのお知らせ

会計状況の好転により、2015年度分より当分の間、会費を値下げし、年会費を一般会員 2000円、学生会員 1000円とします。なお、すでに前納でお支払いいただいた分については、1年分(3800円)を2年分に換算し、差額はいただきません。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 2000円、学生 1000円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 須黒達巳

〒240-0026 横浜市保土ヶ谷区権太坂 1-39-6

TEL：080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

東京蜘蛛談話会例会総会

2015年5月10日 東京環境工科専門学校にて



(1) 藤沢市新林公園のクモ相

池田博明



(2) 久米島採集記～クメジマイボブトグモを探して～

長野宏紀



(3) 多足類とはどんな生きものか

萩野康則



(4) ハエトリグモハンドブック中間報告

須黒達巳



(5) クモの話題3つ
1) Arachnida に対する和名；2) キムラグモ亜科の再分類；3) 日本のアリマネグモ

小野展嗣



(6) ウズ・オウギ・マネキの系統関係の推定

谷川明男



(7) 電子顕微鏡でみたクモの微細構造(16)―篩板類の出糸管の比較―

梅林 力



2014 年度決算

東京蜘蛛談話会

収入の部

2015年5月10日

項 目	決算額(¥)	備 考
1.会費	677,000	
内訳 a.14 年度会費	215,200	欄外 1
b.15 年度以降前納会費	398,000	
c.13 年度以前未納分会費	63,800	
2.寄付	2000	
3.雑収入	4,000	会誌売上
4.別刷り代	29,102	欄外 2
5.利息	854	
収入合計	712,956	
6.繰越金		
(1)13 年度以降前納会費	523,400	
内訳 a.14 年度分	413,200	
b.15 年度分	76,000	
c.16 年度分	26,600	
d.17 年度分	7,600	
(2)特別会計 (プール金)	3,386,786	
繰越金合計	3,910,186	
合計	4,623,142	

支出の部

項 目	決算額(¥)	備 考
1.会誌作成	297,913	105,106 号
2.会誌発送	30,832	
3.別刷り作成・発送	15,592	
4.談話会通信	88,390	141,142,143 号
5.事務局等通信費	47,784	
6.事務用品等	25,935	欄外 3
7.クモ基本 60	13,020	
8.予備費	0	
支出合計	519,466	
9.繰越金		
(1)14 年度以降の前納会費	508,200	
内訳 a.15 年度分	432,200	
b.16 年度分	53,200	
c.17 年度分	15,200	
d.18 年度分	3,800	
e.19 年度分	3,800	
(2)特別会計 (プール金)	3,595,476	
繰越金合計	4,103,676	
合計	4,623,142	

繰越金の預け先：郵便貯金（普通）	¥3,625,656
振替口座	¥426,200
現金	¥51,820
合計	¥4,103,676

欄外 1：14 年度会費は、前納分 413,200 円とあわせて 628,400 円受領しました。

欄外 2：13 年度の別刷り代を一部含みます。欄外 3：八幡明彦さん葬儀献花代を含みます。

以上、報告いたします。2015 年 4 月 1 日 会計 須黒達巳

適切に会計処理されています。2015 年 4 月 日 会計監査 梅林 力

2015 年度予算

東京蜘蛛談話会
2015 年 5 月 10 日

収入の部

項 目	金 額(¥)	備 考
1. 14 年度会費	367,100	
内訳 a.15 年度会費前納分	216,100	1,900 円×109 人+2,000 円×9 人
b.15 年度納入予定分	151,000	2,000 円×66 人+1000 円
2. 寄付	0	
3. 雑収入	0	
4. 別刷り代	50,000	
5. 利息	500	
収入合計	417,600	
6. 繰越金		d. 19 年度分 7,600
(1)15 年度以降の前納会費	110,200	e. 20 年度分 7,600
内訳 a.16 年度分	76,000	f. 21 年度分 1,900
b.17 年度分	26,600	g. 22 年度分 1,900
c.18 年度分	7,600	h. 23 年度分 1,900
(2)特別会計 (プール金)	3,595,476	i. 24 年度分 1,900
繰越金合計	3,887,576	
合計	4,305,176	

支出の部

項 目	金 額(¥)	備 考
1. 会誌作成	400,000	200,000 円×2 回 (107,108 号)
2. 会誌発送	35,000	
3. 別刷り作成・発送	50,000	
4. 談話会通信	90,000	30,000 円×3 回 (144,145,146)
5. 事務費・通信費	30,000	欄外 1
6. 事務用品等	15,000	
7. 総会・例会	20,000	10,000 円×2 回
8. クモ基本 60	1,350,000	
9. 予備費	10,000	
支出合計	2,000,000	
10. 繰越金		d. 19 年度分 7,600
(1)15 年度以降の前納会費	110,200	e. 20 年度分 7,600
内訳 a.16 年度分	76,000	f. 21 年度分 1,900
b.17 年度分	26,600	g. 22 年度分 1,900
c.18 年度分	7,600	h. 23 年度分 1,900
(2)特別会計 (プール金)	2,013,076	i. 24 年度分 1,900
繰越金合計	2,305,176	
合計	4,305,176	

欄外 1：事務局 5,000 円，編集 5,000 円×2 人，通信 6,500 円，会計 5,000 円
通信費，振込手数料等 3,500 円

2014 年度会員動向

2014 年 4 月 1 日時点の会員数 193 名

入会 12 名，退会 2 名

2015 年 4 月 1 日現在の会員数 203 名（一般 175 名，学生 28 名）

クモが出てくる子どもの本情報（12） 2015年に出版された雑誌2点の紹介

萩野 康 則

福音館書店発行の児童向け月刊科学雑誌「かがくのとも」と「たくさんのふしぎ」に、今年になってクモの作品が立て続けに2つ掲載されたので、今回はそれらを紹介させていただく。「かがくのとも」は5～6歳児向け、「たくさんのふしぎ」は小学校中学年向けである。なお、福音館書店からは「こどものとも」シリーズという月刊物語雑誌も4誌発行されている。



小林 俊樹（文）・石橋 真樹子（絵）「クモをみつけよう」 かがくのとも 2015年1月号

25×23cm/28pp. 福音館書店 雑誌コード 02377 本体 389円

兄弟とおぼしき少年二人が、夕方帰宅してみると、軒先に大きな網が張られていて、真ん中にオニグモがいた。ところが翌朝になると網がない。よく探してみると軒下にクモが縮こまって隠れているのが見つかった。その日の夕方、クモは尻から糸を出して風に流して網を張り始め、1時間ほどで完成した。するとすぐに蛾が網にかかり、クモが糸でぐるぐる巻きにして食べ始めた.... 初めてク

モに関心を持ってすぐに、網を張る様子や網に獲物がかかる瞬間を観察できる、というのはかなりご都合的な展開だと思うが、もしそんな幸運に巡り会えば、クモの魅力のとりこになること請け合いである。

その後二人の少年は、公園や家の周囲で様々なクモを発見する。円網種としてコガネグモ、コガネグモ幼若個体、ナガコガネグモ、カタハリウズグモ、ゴミグモが、非円網の造網種としてクサグモ、クスマサラグモ、オオシロカネグモ、オオヒメグモ、アシナガサラグモが、変則的な網や住居をつくる種としてマネキグモ、オナガグモ、ヒラタグモ、ジグモが、徘徊種としてアリグモ、ワカバグモ、アズチグモ、ササグモ、イオウイロハシリグモが登場する。また、網を張らないクモでも歩行中はつねにしおり糸を引いていることをマミジロハエトリで説明している。さらに、これ以外の網の使用例として卵のう（チリイソウロウグモ、コガネグモ、オオヒメグモ、ナガコガネグモ、ジョロウ

グモ、イオウイロハシリグモ)を紹介している。最後に、卵のうから出た子グモがバルーニングして分散することにも触れている。裏表紙には、本文に登場しないオオトリノフンダマシ、ハナグモ、ワキグロサツマノミダマシ(ただのサツマノミダマシかも?)も描かれている。

登場するクモの全種について、濃いグレーの実物大のシルエットが示されているのだが、私にはこれが大きすぎるように見えた。特にオニグモ、ナガコガネグモ、ジグモなどは巨大に感じられた。しかし最近出た「クモハンドブック」(馬場友希・谷川明男/著、文一総合出版、2015年)の実物大写真と比べてみると、体長はほぼ同じであった。体位や脚の太さなどによって大きく感じたようである。14ページのコガネグモとナガコガネグモが網を張っている場所にやや違和感があるが、全般としては身近なクモ種が、造網形態別にコンパクトに紹介されており、小学校就学直前の子どもたちがクモに興味をもつための、格好の入門書になっていると思う。

小林俊樹さんは東京都多摩動物公園に勤務し、昆虫園に建設時から関わり、その発展に寄与された方である。特に甲虫の飼育に詳しく、学研の図鑑「飼育と観察」(学習研究社、1971年)の指導・執筆、「カブトムシ・クワガタムシのふしぎ」(学習まんがふしぎシリーズ20、小学館、1981年)の構成と執筆、「カブトムシ・クワガタムシのじょうずな育て方」(ねころの一む/著、メイツ出版、2008年)の監修などをされている。「かがくのとも」では「にわさきのむし しゃがんでみつけた」(たかはしきよし/絵、1980年7月号[1986年単行本化])や「ぼくのわたしのこんちゅうえん」(津田櫓冬/絵、1994年4月号[2000年単行本化])などを書かれている。

石橋真樹子さんは絵本作家で、美大在学中は主にシルクスクリーンによる作品を制作されていた方である。福音館書店の児童雑誌の「常連」で、「しはつでんしゃ」(こどものとも年中向き[4~5歳児向け]2006年12月号[2013年単行本化])、「フェリーターミナルのいちにち」(かがくのとも2008年8月号[2012年単行本化])、「でんしゃがきた!」(ちいさなかがくのとも[3~5歳児向け]2013年2月号)といった、子ども(特に男の子)が大好きな乗りものに関する作品を多く発表している。また、「うみべのごちそう」(かがくのとも2006年5月号)、「はいしゃへいくひ」(こどものとも年中向き2009年3月号)、「かまきりのかんちゃん」(こどものとも2010年11月号)の、ご自身の経験に基づいた、何気ない日常をしみじみとほのぼのと描いた作品もある。これまでの作品では文章も書かれていて、絵のみを担当するのは今回が初めてである。本作品は色鉛筆と水彩絵の具を主に使用していると思われるが、シルクスクリーンの専門家だけあって、色彩が非常に鮮やかである。

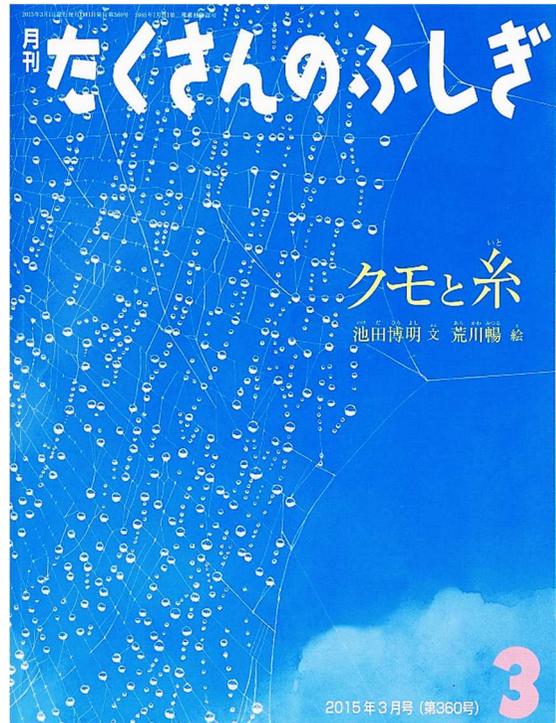
池田 博明(文)・荒川 暢(絵)「クモと糸」 たくさんのふしぎ 2015年3月号
B5変判/40pp. 福音館書店 雑誌コード15923 本体667円

池田博明さんについては、今さら紹介するまでもないだろう。大学卒業後、神奈川県の高校教員を勤めながらクモの研究を進め、特にハエトリグモの分類では日本の第一人

者である。またその温厚な人柄と博識ぶりによって談話会に不可欠な存在となっている（何を隠そう、私が談話会に入会しようと思ったのも、池田さんの存在によるところが大きかった）。理科教育全般に熱心に関わっておられ、生物教科書編集委員や理数教育研究所生物領域部会副委員長を勤められている。他にも映画や音楽、読書などにも造詣が深く、「SPIDER DATA」「ハエトリグモ研究センター」「IKEDA HOME」「高校生物」などのウェブサイトを開発・運営して積極的に情報発信している。また、当談話会のページも池田さんが管理されている。著書に「クモ生理生態事典」（自刊、1988年）、「クモのはなしⅠ・Ⅱ」（共著、技報堂出版、1989年）、「カラーアルバム クモ」（佐藤有恒/写真、誠文堂新光社、1996年）、「クモの巣と網の不思議」（共著、文葉社、2003年〔2013年夢工房より増補改訂版発行〕）など、訳書に「クモ・ウォッチング」（P.ヒルヤード/著、共訳、平凡社、1995年）がある。

荒川暢さんは美術大学大学院でリトグラフを学ばれ、1994～96年に文化庁派遣芸術家在外研修員として渡米されている方である。石橋真樹子さんと同様に福音館書店の児童雑誌の「常連」で、「ちいさなかがくのとも」では「かにかにのすなだんご」（2002年7月号）、「びよーびよーくるかな」（叶内拓哉/文、2004年5月号）、「しょぼろしょぼろまちのかわ」（小野寺悦子/文、2006年9月号）、「なみとび」（八百板洋子/文、2010年8月号）がある。また「たくさんのふしぎ」には「コアジサシ ふるさとをなくした渡り鳥」（増田直也/文、2007年5月号）を、「こどものとも 0.1.2. [10ヶ月～2歳児向け]」には「すずめ ちゅん」（荒川薫〔暢さんの実母〕/文、2009年9月号）を発表されている。リトグラフをされていた方だからか、版画的な印象を与える作品もある一方で、にじみを効果的に使用した水彩系の画風の作品も多い。

本作品は「クモと糸」のタイトルが示すように、クモが糸をどのように利用しているかを、代表的な例について解説したものである。登場するクモ種とその糸の利用を中心とした生態的特徴（〔 〕内）を列挙すると以下のとおりである：ワスレナグモ [地中性・蓋なし]、キシノウエトタテグモ [地中性・蓋あり]、ジグモ [地中性・袋状住居]、ミスジハエトリ [徘徊性・しおり糸]、ハナグモ [徘徊性・待ち伏せ]、アズマキシダグモ [徘徊性・求愛ギフト]、ヒラタグモ [受信糸]、ナガコガネグモ [垂直円網・伸縮す



る網で獲物を逃さない] , ジョロウグモ [垂直円網・細かな網で小さな虫を逃さない] , クロガケジグモ [ボロ網・からみ糸] , アシナガグモ [水平円網・開こしき] , クサグモ [棚網] , ミズグモ [水中生活] , ネコハグモ [テント網・からみ糸] , ボカシミジングモ [アリ専食] , オナガグモ [クモ食] , ズグロオニグモ [人工物の照明そばに造網] , ムツトゲイセキグモ [投げ縄] .

導入の 1-2 ページは公園そばの草むらで少女が地面をながめており、最後の 40 ページは同じ場所の樹間でクモが網を張っている場面になっている。その間に上述のクモ種と糸の利用状況が、見開き 2 ページで説明されている。各見開きは池田さんの練りに練られた解説文と、荒川さんの素晴らしい生息環境の絵ならびにクモと網の渾身の細密線画で構成されている。解説文は限られたスペース内に、伝えたいことが盛り込まれており、おそらく周到に推敲された結果の産物だと思われる。また、各解説文には「そとはこわい」(ワスレナグモ) , 「あのこにあげたい」(アズマキシダグモ) , 「どうぞわたって」(オナガグモ) のような、「クモの網 What a wonderful web!」(船曳和代・新海明/著, INAX 出版, 2008 年) を彷彿とさせる気の利いたタイトルがつけられている。

荒川さんの生息環境の絵は、濃い鉛筆のみで描かれており、やや直線的な太い輪郭線(特に人物)と細かな描き込みをした後に影が付けられている。1-2 ページと 40 ページには水彩絵の具で彩色されているが、その間のクモ種の解説ページには、クモがいる場所に円く黄色をのせてあるだけである。実は大変丁寧に、時間をかけて描かれているはずだが、一見下書きっぽいラフな印象を与えていて、これがクモと網の細密描写を实によく引き立てている。クモも網も素晴らしいの一言につきるが、特に円網に付いた水滴の描写はお見事と言う他はない。

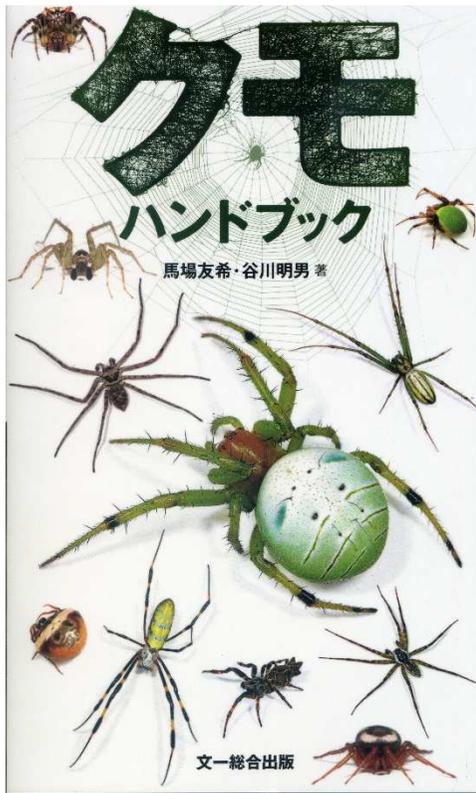
巻末の付録「ふしぎ新聞」に書かれている「作者のことば」も、いきなり開高健が出てくるあたり、いかにも池田さんらしくて秀逸である。

これまでに無かったタイプのクモの児童書として、比較的近いうちに単行本化されることを確信している(ただし単行本には「作者のことば」は収録されない)。

と、絶賛してきたが.... 最後に一つだけ、ネガティブなことを書かせていただきたい。私は最初この作品を見たときに、率直に「小学校中学年向けではないな」と感じた。文字が小さい。分量が多い。漢字が多い。「中学年向け」ではなく「中学生向け」とするのが適切ではないか、と思っただけである。のちに池田さんが *Kishidaia No.106* に書かれた「『クモは虫を食べる』の構想」を読んで、この作品が当初大人向けに書かれたことを知り、なるほどと思ったのだが、10 歳の子どもに読ませるのだったら、伝えたいことをもっとそぎ落として文章量と漢字を少なくし、字を大きくするべきだったと思う。これは注文をつけるのは簡単だが、実際に自分が著者になったら並大抵のことではなかろう。しかし池田さんの熱意と力量をもってすればそれを成し得たのではないか。そう思い、敢えて苦言を呈する次第である。

なお、「たくさんのふしぎ」2015年7月号は遠藤知二（文）・岡本よしろう（絵）の「おいかけっこの生態学 キスジベッコウと草むらのオニグモたち」である。このコンビによる「まちぼうけの生態学 アカオニグモと草むらの虫たち」（2011年8月号・本誌133号で紹介済み）の続編で、6月3日に発売される。前作はアカオニグモと網にかかる昆虫を中心にした話だったが、今度はクモを狩るベッコウバチとの攻防についての話になるとのこと。発売を楽しみに待ちたい。

新刊紹介



クモハンドブック

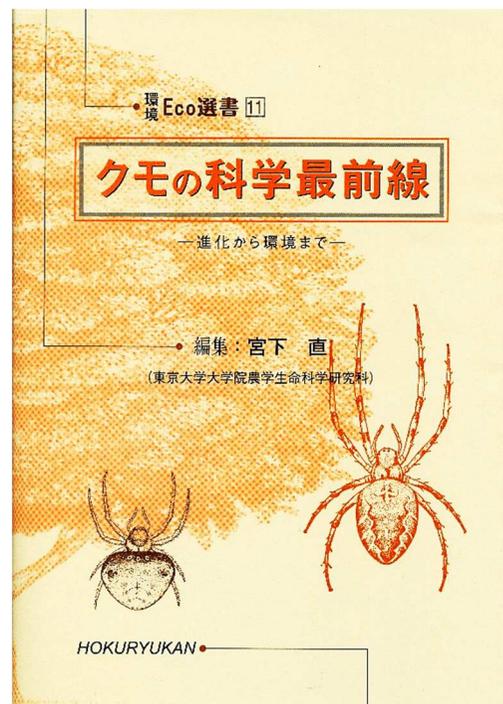
馬場友希・谷川明男著

112p ISBN 978-4-8299-8128-3

1620円（税込）

文一総合出版

クモの科学最前線
宮下 直編集
252p ISBN 978-4-8326-0751-3
3780円（税込）
北隆館



蜘蛛の名のつく植物について

和 仁 道 大

これはクモの話ではなくて恐縮ですが、4月の初旬に高尾山に行ったとき、植物に詳しい仲間が「これは珍しいシダでクモノスシダと言います」と教えてくれた。よく見ると根元から数枚の細長い葉が伸びており、15cm位に伸びると先端が地上に着いて、そこから根付き新しい芽（葉）が出ていた。このように1か所から放射状に広がっていくのをクモの巣に見立ててクモノスシダ（チャセンシダ科）と名付けられたらしい。葉には孢子も見られた。生育場所はケーブルカー高尾駅近くの1号路に沿った石垣に周辺である。千葉県レッドデータブックを見ると、清澄山周辺の陰湿な岩場にも生育しており、要保護生物（ランクC）になっている。

ついでに名前にクモとついている植物を調べてみると、次のようなものがあった。

・クモラン（ラン科）

社寺林などの照葉樹の幹に着生する無葉性の草本で、放射状に伸びる灰緑色の根で樹木に付着した姿がクモを連想させるところからこの名がついた。千葉県レッドデータブックでは最重要保護生物（ランクA）になっている。

・クモキリソウ（ラン科）

亜高山地帯の落葉樹林内や草原によく見られる植物で、花の形をクモに見立て、「蜘蛛草」から転じてクモキリソウとなったという説がある。花は5-6月に5-10花つけるが、一般には淡緑色をしており、これをアオグモと呼び、まれに淡い暗紫色に咲く株をクログモというらしい。

千葉県レッドデータブックでは要保護生物（ランクC）になっている。

・クモノスバンダイソウ (*Sempervivum arachunoideum*) (ベンケイソウ科) 園芸名：巻絹

ヨーロッパ南部の山地が原産で、ロゼット状の新葉の先端に白い糸状の毛を伸ばし、クモの巣状に地表を覆うところからクモノスとついたらしい。上記のように学名にもクモが入っている。

・クモノスゴケ（苔類フタマタゴケ目クモノスゴケ科）

・クモノスカビゴケ（蘚類アブラゴケ目クモノスカビゴケ科）

海松 知朱（みるかしちあき=八幡）様へ

加藤 むつみ

私が知っているみるかしさんは、ネット内だけで、現実の世界でお会いした時は、御挨拶くらいで、お話しする事は、ありませんでしたね。たぶん..私の、ネットを履歴は、2000年の1月くらいからだったと思います。物珍しさもあって、みるかしさんのサイトの掲示板に書き込みをした記憶が、微かにあります。その後、何度かメールのやりとりもさせて頂きました。その時の印象は、真面目で、繊細で、シャイな方だというものでした。

その後、現世でお会いした八幡さんは、まったく違った印象に見えました。(決して、風貌の事を言っているわけでは、ありませんよおお。(´O`)／＼)) そのため、名の事もなく15年の年月が流れ、お亡くなりになったとの知らせを受け、さらに、沢山の方からよせられた KISHIDAIA の追悼文を読み終えて、最初の印象が、間違いでなかったと思いました。

そんな印象を持つに至ったみるかしさんと、いったい、どんな話しをしたのだろう..と、パソコンの中じゅう探したら、奇跡的に残っていた2通のメールを見つける事ができました。1通は、掲示板の書き込み方法に関するサポートで、もう1通は、TV出演した八幡さんちのタランチュラの私の感想への返信でした。私的なメールを公開すべきか、迷ったのですが、とても、みるかしさんらしい気がして、御紹介する事にしました。(本文のまま)

(2000.3.3)

リムルス@かとうさま

テレビの感想を送ってくださりありがとうございます。

- > タランチュラが毛を飛ばして、敵を威嚇するところ始めてみました。テレビを見た
- > ときは「へえー、タランチュラって結構言うこと聞くんだあ。」と思ったのですが、
- > そんなにうまくいかないですね。

まったく馴れない動物ですから、こちらの言うとおりににはできません。向うの行動パターンを読んで、「こちらが慣れる」しかない相手です。でも、その何を考えているかわからない距離感、緊張感が、わたしは好きです。

> みるかし様も、モンローさんも、本当にお疲れさまでした。あれ？毛を飛ばしていた
> のは誰でしたっけ？

毛をとばしたのは、ブラジリアンサーモンです。あの撮影のおかげでお尻がツルっパ
ゲになってしまい、可愛そうでしたが、近々脱皮して綺麗な毛を取り戻しそうです。

> でも、理解のある御家族そうであらやましいなあ。

わが手中にある娘たちはさておき、登場しなかった家族たち（両親含む）が問題です。
(爆)

HPを今後ともよろしく。

海松櫃 知朱（みるかしちあき）

何を考えているかわからない動物たちを沢山飼われていた、みるかしさんは、とても
良い観察者であり理解者であり飼育者であったと思います。そして、その動物たちの様々
な生態やその生態に至る原因(理由)に気付いていた気がします。その事を伺う事なく今
居る事を、とても後悔しています。(涙)

リムルスかとうより

オニグモと風うさぎ (2)

加藤 康子

また、新しい風が吹きはじめました。オニグモと風うさぎは空を見上げました。果て
しない青紫色が広がって 星がひとつ またひとつと光を放ちます。

「さあ 出発だ」

風うさぎはユリの木に沿って吹きあがる風をつかまえ 木のまわりを巡りながら ゆっ
くりと上昇していきます。上から見るユリの木は 想像以上に大きく枝を伸ばして、ま
わりの木々を圧倒する高さに成長していました。枝先には花がいくつか咲いて、黄緑色
の花片に白い雄蕊がリボンのように引き立っています。

オニグモはその姿を眺めて、なんだか誇らしい気持ちになりました。彼女にとっては、そこは子供のころから住み慣れた家でもあるのです。

「もっと上まで昇るよ」

風うさぎは右、左、と交互に足を動かし、風船を操っていきます。

「あなたはうさぎなのにとても上手に風船を動かせるのね、空を飛ばせる技をどうやって覚えたの？」

「それは、ぼくの父さんもおじいさんも風うさぎだったからだよ。父さんはおじいさんから、ぼくは父さんから、風船乗りの技を教わったってわけさ」

風うさぎは胸を反らして勢いよく両足を動かし、ずんずんと風船を上昇させます。

遥かに遠い山の稜線のむこうにひとときわ明かるく光の滲む空が見えてきました。

「ほら見て、もうすぐ月の出だよ。いっしょに眺めよう」

オニグモと風うさぎの見守るなか、彼方の空はいっそう赤みを帯びてきます。夜へ移りゆく前のひとときを背景に、大きな赤い月が、しずしずと昇ってきました。

満月です。

そのゆっくりとした動きを見つめているとすべての時が止まって、ただ満月だけが空に向かって昇っていくような、不思議な感覚になります。やがて山の端を離れて空に浮かんだ満月は、あたり一面にくまなく光を注ぎ、地上の風景は、くっきりと光と影をもって浮きあがってきました。止まっていた時も再び動き始めたように感じられるのでした。

「みごとなストロベリームーンだ」

「なんて、大きい月なの」

オニグモの心臓はドキドキと大きく鼓動しました。こんな完璧な月の姿に遭遇できるなんて考えたことがあるでしょうか。これまで、ユリの木の葉の隙間から、ほのかに洩れる月明かりしか見たことが無かったのです。ほんの少し空中を動いただけなのに、まるで見知らぬところへ飛んでいったかのようなようでした。

☆

風船は風に乗って、ざわめきも消えていきました。月映えの景色は変化に富んだ起伏と色彩で描き分けられた大きな絵に見えます。風船の動きにつれ、その絵はくるくる廻ったりぶらんこのように左右に流れたりしながら進んでいきます。

オニグモは、何かをぼんやりと感じていました。身体のだこか片隅の方から、心の中心に向かって自然に湧いてくるもの……。

嬉しいのか、悲しいのか、何だか背中がゾクゾクするような……。よく解らない気持ちです。

それは、まだ幼かったときに兄弟姉妹と共に、なつかしい母の匂いの残る卵のうを出て、“まどい”をつくり、やがて風に糸を飛ばして、それぞれの場所を目指して旅立った、あの日の経験にとても似ているのです。

一種 たとえようのない興奮というものなのかも知れません。こんな気持ちになるのは、足の下に感じる糸が フルフルと風にあおられて震えるからでしょうか。オニグモは身体の内から湧いてくるこの思いにつられて網のたて糸を爪でピンと弾いてみました。

『何だか、 良い、 感じ!』

彼女はしおり糸を繰り出すと 八本の足を伸ばして ふわ ふわ と踊りはじめました。

「ウーッ 久し振りに子供にもどったみたいな気分だわ」

風うさぎはそれを見てくすくすと笑い つぶやきました。

「満月の夜は クモさえも踊る。だね」

「満月は誰にとっても嬉しいよね ぼくにとっても何より大切なものはお月様さ。この月の光の助けが無いとぼくは風の色を見ることはできないのだから。それに、みんなが出会って話したり遊んだりして風を巡らせるときには きっと月の力が働いているって思うんだ。月は夜の世界の指揮者だからね」

風うさぎは語り続け オニグモはふうーとため息を洩らしました。

☆

ふたたび軽やかな風が吹きあがり、風船は速度を増していきます。眼下には樹木の繁る森が続き 森の周囲はパッチワークのような畑のふちどりが広がって見えました。

「見て! あの森には緑の風が吹いているよ。ところどころに光るオレンジ色は動物や虫たちの出す風の色だよ」

森の木は吹く風によそぎ ざわざわを葉擦れの音も聞こえます。

「そうね 緑濃い森に風が吹いて、とても清々しい眺めだけど、森が緑に見えるのは当り前のことだし 特別な意味は感じないわ。だって、それ以外のものは私には何も見えないもの」

オニグモは独り言をつぶやくと 急に歌い出しました。

♪ 誰が風を見たでしょう

ぼくも あなたも見やしない

けれど木の葉を震わせて

風は通り抜けてゆく ♪

(クリスティナ・ロゼッティ詩)

風うさぎは顔を真赤にして口をとがらせ、風車を持った手を振り廻しました。

「その風のことじゃないってば！」

☆

風船は森を過ぎ、大きな湖の上に出ました。

「見て! こんどは湖に青い風が吹いている。ところどころに光るオレンジ色は魚達の起こす風の色だよ」

湖面は青く澄みわたり、月の姿を写す鏡でした。冷んやりとした水の匂いを吸い込んでオニグモは深呼吸しました。

彼女の少し強張っていた気持ちもほどけて、なにか胸の奥がむず痒いような変な気分です。オニグモは考えました。

『その風、あの風って、私はもうそんなことにはこだわらないことにするわ。思いがけなく月夜の飛行に出ることになって 出会うものすべてが新しい経験ばかりだもの。

そりゃあ 私には風の色なんて全然見えないし、何んというか風うさぎの話すことは



現実離れしていて、おまけに 感嘆詞が多過ぎるところは、ちょっとうんざりだけど、とにかく 色んなものを見て聞いて楽しい旅にしたいの。』

☆

湖のほとりに木々の間のひらけた場所が見えました。円形の広場に沿って赤や青の灯火が並び にぎやかな音楽も流れています。

色とりどりの服装をした人々が集まって、何かのお祭りでしょうか。女も男も子供達も音楽に合わせて踊ったり てんでに おしゃべりしたり走り廻っていたりして、そこだけポツカリと宝石箱の中を覗くようでした。

「わあ これはすごいお祭りさわぎだ。数え切れないバラエティだよ。人間の生み出す風の色は千差万別、まるで動く点描画だね。こうして楽しく過ごしている限りは混じり合うことなく ひとりひとりが色あざやかな風を起こしている。ぼくはずっとこういう場面を見たいと思ってたよ。なんてきれいな色なんだ。」

「もしも、もしもってことだけど、この人達が争いを始めたとしたら 風の色はどうなるのかしら。」

オニグモは好奇心いっぱい聞きます。

「それはもう大変だよ。色と色とはごちゃごちゃに混じり合い だんだんと黒ずんでいき 最後には真黒さ。それはね、混沌と呼ばれるものになってしまうんだって。父さんに教わったことだけだ」

☆

風うさぎの声に耳を傾けているとき、オニグモは ふっ と気がつきました。広場にいる人々の声や 流れている音楽が作り出す空気の波動がとても心地良く感じられるということです。

その波動は、帯状になって湖の上空を広がってゆき、オニグモの鋭敏な足先にまで届いたのです。そして身体の隅々 突き出た二本の牙の先までも心地良い振動として伝わってきました。

その印象は、言葉にすると、“ワクワクする” “笑いたくなる” “幸福な気分” というようなものでした。オニグモにとっても これは新しい経験です。彼女の全身は、“幸福な気分” そのものになって振動しました。

オニグモは、しおり糸を大きく揺らすと歌うように、ひとこと声をあげました。

「ファンタスティック」